



「声」の欄・投稿規定

★「声」の欄は読者の皆さんのお考えを、直接この雑誌に反映させるためのページです。皮膚病の診療に関する日ごろのご意見、新しいアイデア、ご提言などをお気軽にお寄せください。とくに日夜第一線で診療に活躍しておられる先生方からのご投稿を切望します。

★この欄にはまた皮膚病に関する“質疑応答”を取り上げます。お寄せいただいたご質問は、その方面の権威に依頼して適切な回答を用意し、誌上で発表いたします。とくに回答者を指名されても結構です。

★字数は一般のご投稿は1,200字以内、質問は600字以内を原則とします。

★ご投稿は郵送のほか、FAX（番号：03-3575-4748）とE-mail（アドレス：hifubyoh-shinryoh@kk-kyowa.co.jp）にても受け付けております。

★誌上での匿名は随意ですが、原稿には住所・氏名を明記していただきます。

血管拡張性肉芽腫

昨年12月の「声」欄での木花光先生と浅井俊弥先生の熱のこもったディスカッションには敬服いたしました。

対象となった論文の再発性血管拡張性肉芽腫と同様の症例を老生も宮崎大学を平成12年に定年退官する前年に経験したので「衛星病巣を追発した小葉状毛細血管腫（毛細血管拡張性肉芽腫）」という表題で報告¹⁾したことがあります。その要旨は、血管拡張性肉芽腫（granuloma telangiectaticum）という百年以上も使われてきた愛着のある病名の炎症反応は表皮壊死などによる二次的現象であり、肉芽（granulation）を伴っても肉芽腫形成はまず認められず、本体は毛細血管内皮細胞の増殖症であるという学説²⁾に賛同し、臨床病名としてはbloody wart³⁾（血瘤腫）、病理組織学的病名としてはlobular capillary hemangioma²⁾（小葉状毛細血管腫）を用いるのが実地診療に即していると提唱したのです。

それから15年が経過した今でも老生は保健病名として血管拡張性肉芽腫を用いています。

<文 献>

1) 田島誠也ほか：西日皮膚 61：613, 1999

2) Mills, S.E. et al.：Am J Surg Pathol 4：470, 1980

3) Cooper, P.H., Mills, S.E.：Arch Dermatol 118：30, 1982

井上勝平

（飯田市・井上医院）

化膿性肉芽腫の歴史的背景

化膿性肉芽腫の歴史を示す記載を見つけましたので、その内容を報告します。

化膿性肉芽腫は、1879年Rivoltaが、馬の去勢手術を行った後に、精索に出現した腫瘤を“Mulberry-like tumours（桑の実様腫瘍）”として記載したのが最初といわれています。その後Bollinger（1887）が、痂皮の中で増殖する特別な寄生虫が原因で惹き起こされるとし、この寄生虫を“Botryomices”と名付けました。Poncet（1897）¹⁾は、リオンの病院で、55才の女性の右第V指掌側付け根に、赤い斑点として現れ、ゆっくりと成長し、ついにはヘーゼルナッツ大の有茎性の結節にまでなった例を観察し、馬と同様の症状がヒトにも出現するとして、“Human Botryomycosis”と命名しました。これがヒトでの最初の報告です。その後、Bodin²⁾は、Botryomycesは黄色ブドウ球菌であることを示し、Crocker³⁾も化膿性肉芽腫を“fungating tumours produced by pus cocci”と定義し、細菌感染に基づく変化と捉えました。当時は臨床診断が難しく、Sarcoma, Melanosarcoma, Kaposi’s sarcoma, Aggressive cancerなどの臨床診断が下され、病理組織で化膿性肉芽腫と診断された例が多く見られており、また、化膿性肉芽腫の臨床診断で、病理診断が悪性腫瘍であった例も見られたようです。

以後、化膿性肉芽腫について、細菌の役割、肉芽腫の原因検討が行われ、細菌感染は二次的なも



ので, “a type of capillary hemangioma”あるいは“glanulation tissue”であり, 誘因として, 外傷が大きく関与していることが明らかにされ⁴⁾, 今日に至っているとのことです。

<文 献>

- 1) Poncet A : Lyon Med 86 : 217, 1897 from “Classics in Clinical Dermatology” ed. by Shelley WB and Crissey JT, The Pantheon Publishing Group, New York & London, 2003
- 2) Bodin E : Ann de Dermat Syph 3 : 289, 1902
- 3) Crocker HR : “Diseases of the Skin”, Vol 2, p.1081, G Blakeston, Son & Coy, Philadelphia, 1903
- 4) McGeoch AH : Pyogenic granuloma. Aust J Dermatol 6 : 33, 1961.

西岡 清

(本誌編集委員長)

「皮膚病診療」既刊号のご案内

Vol.34, No.6	足底の皮膚病	No.5	生物学的製剤・副作用
No.7	膿疱を伴う皮膚疾患(2)	No.6	隆起する皮膚疾患
No.8	炎症性内科疾患と皮膚	No.7	陥凹する皮膚疾患
No.9	腫瘍性内科疾患と皮膚	No.8	汗と皮膚病
No.10	汗腺・汗管由来の良性腫瘍	No.9	内分泌異常と皮膚病
No.11	循環障害(2)	No.10	小児の皮膚病・炎症性
No.12	sexually transmitted infections (STI)	No.11	小児の皮膚病・腫瘍, 母斑
増刊号	接触皮膚炎症例集	No.12	ワクチンと皮膚病
Vol.35, No.1	サルコイドーシス—2013	増刊号	signs & symptoms
No.2	顔面の紅斑(2)	Vol.37, No.1	外用製品による皮膚病
No.3	痤瘡・痤瘡様発疹	No.2	関節痛と皮膚疾患
No.4	アミロイドーシス(2)	No.3	肝臓病と皮膚疾患
No.5	体幹の皮膚病—炎症性	No.4	毛髪関連疾患
No.6	体幹の皮膚病—非炎症性	No.5	接触皮膚炎—2015
No.7	旅行皮膚病	No.6	呼吸器と皮膚
No.8	全身症状を伴う皮膚疾患(1)	No.7	腎と皮膚
No.9	全身症状を伴う皮膚疾患(2)	No.8	肉芽腫性炎症
No.10	強皮症およびその関連疾患	No.9	再発する皮膚病
No.11	薬疹—2013	No.10	手指の皮膚病
No.12	皮膚真菌症(7)	No.11	手の皮膚病
増刊号	誤診しやすい皮膚疾患	No.12	痒みのない皮膚病
Vol.36, No.1	結節性紅斑とその周辺	増刊号	皮膚真菌症症例集
No.2	滲出性紅斑とその周辺	Vol.38, No.1	筋膜・皮下組織の疾患
No.3	網状を呈する皮膚疾患	No.2	物理化学障害による皮膚病
No.4	生物学的製剤・有用性	No.3	播種状の皮膚病